

正宗白鳥

現代作家論



# 現代作家論



私はかつて菊池寛を観ていたような気持で石川達三を  
観て来た。その作品に、豊醇な文学味がある訳ではない  
が、文学を手段として、広く現実の世界に生きんとする  
意欲の動いているのに、私は彼等の作品と、その文学態  
度に、興味を持っている。それで私は石川の作品でも、  
感想文でも、かなりよく読んでいる。個人としての彼は  
ほとんど知らないし、また知ろうとも思っていない。文  
章の形において現われたる範囲だけの彼を観察し検討せ

んとしているだけである。「蒼氓」をはじめ、「かえらぬ兵隊」「使徒行伝」「結婚の生態」「お蓮抄」「望みなきに非ず」「風にそよぐ葦」最近の戯曲その他戦争当時の新聞雑誌の作品の、あれやこれやを読んでいる。完備したものであるうがなからうが、粗野であろうが、鈍味であろうが、現代味豊かな一個の人間として、一個の文学者として、私の空想裡に、可成り鮮明なる影を落している存在物として面白いのである。我等の生存している時代に対して或は順応し、或は反抗している微妙な態度も面白い。明治初年、北海道の農学校に一、二年教師と

なっていたクラークとかいう外人は、学校を去るに臨み、若き教え子に向つて「ボーイ等よ、アンビシアスであれ」と、別れの帽子を振つて激励の語を吐いたそうである。

「ビー、アンビシアス」と、文学の神は石川に向つて言っているようである。この警告は他の壮年青年の文学者に向つて言うよりも、石川に向つて言われるのが、最もふさわしいのである。彼はそういう激励語を受入れるのにふさわしい文学的體質をそなえているのである。もつと具体的に言つて見れば、或は私の空想裡の石川について言つると、彼は、芸術院賞や読売文学賞などは、眼中に

ないので、ノーベル賞を狙っているのである。虎視眈眈と、その得るに甲斐ある獲物を狙っているのである。志小でないと云っていい。

彼は、花袋の「田舎教師」藤村の「新生」秋声の「縮図」などを、どこがいいのかと、ある雑誌所載の感想録のなかで、簡単に言切っていた。他の同輩の作家はそれ等旧作家の代表的作品に因習的敬意を多少払う傾向があるが、彼はそういう感じを持っていないし、むしろ持っていない事をほこりとしているのである。文学青年のにおいがないのである。花袋は「個に徹する」ことを言っ



ていた。藤村もそういう気持をもっていたのであろう。石川は個に拘泥しないで、時代を観ようとした。時代の動きを見ようとした。それだけなら、かつてのプロレタリア作家の態度の如く、あるいは、文学意識のない、政治家や政治評論家などの通俗的心境の如く、浅薄凡庸と言っているのであるが、彼は風格面丰は異っていても、おのずから、彼は彼なりの文学精神を具えている。個に徹せんとしている。彼は虎視たんたんとしながら、そしてふてぶてしく自信の筆を運んでいるようでありながら、意識的に或は無意識的に迷っていることは、幾つか

の作品を読んでいると感得されるのである。

「風にそよぐ葦」は、一通り時代をうつさんとした、さまざまの作家のさまざまな作品と同様に、真に徹しないで、ややもすると通俗に墮しているようにも思われるが、そのへまなところ、とちつているところに、時代の生きた影を、私は見るのである。「結婚の生態」は花袋の描く或作品に似ているようなところのあるのなど、意外であるが、花袋の甘さには涙があるが、石川の甘さには涙がないのである。

「お蓮抄」には鷗外と言ったところがある。しかし鷗外

の方が古い。

私はこの頃文学の行衛を考えている。文学の行衛は、私などにとっては、人世の行衛と言ってもいい。あるいは日本の行衛といってもいい。文学も要するに時代の反映であり、右往左往して、落ちるなら落ちるところへ、おのずから落ちて行くのである。それで、時代を反映して、右往左往している現代文学の姿を、私は、誰のよりも、石川の作品において見るのである。あの時の札幌農学校の生徒のうちには、アンビシアスであれといった恩師の言葉を服膺ふくようして世に進んだ者もあつたであろうが、

時代の波の動き次第で、志を達したものもあろうし、沈没したものもあつたであろう。強い素質を持っている彼石川は、どういう風に泳ぎ抜けるか。

石川は幾十巻の長編大作を書き通す逞しい吉川英治を目標とするような口吻をどこかで洩らしていた。さもあべき事である。それでは吉川はどのような作家であるか。

私の年少の頃、内田魯庵は「文学一斑」と題した、今日なら「文学入門」と名づくべき書物を発表した。私など教えられるところが尠くなかった。そのなかに、平家

物語は日本のイリアッドであると言っていたので、私はそういうものかと、何の疑いもなく受入れていたのであったが、後日、イリアッドを読んで、この東西の古典はどちらも叙事詩であるとは言え、似ても似つかぬものであることを知った。近松は日本のシェークスピアであり、馬琴は日本のスコットであると断定するよりも、もっと類似性の乏しいものである。魯庵はイリアッドを読みこなしていなかっただのだ。

しかし、平家物語は、日本人にとっては、いつまでも魅力のある叙事詩である。この物語に叙せられている源

平家家の興亡や闘争には、一つ一つ詩趣があるのである。そして、それ等の一つ一つが、後世の詩の題目となつていたのである。吉川英治が、作中のあれやこれやを断片的に取扱うのではなくって「オール平家」として、終始を通じて題材としたのは、志小ならずと云つていい。吉川流にアンビシラスであるといつていい。

平家物語の新解説ともいえるし、この物語を素材として、あのころの時代と人とを、今日の頭で批判的に描かんとしているともいえる。私は、この新物語の連載されている週刊誌によつて、幾つかを断片的に読んで面白い

と思った。文章も「武蔵」よりもあくが抜けて、品がよくなっていると思った。淡々たる筆致に多少の詩趣があると思った。「源三位頼政」の条下を偶然見たのだが、これなどは、今の時世の人間を観ているような、その心境と人間振りが素直に、ある意味で言うところと純文学的に写されていた。重盛の如きも、在来の型を破って、しかし、伝説的重盛を無視しないで、伝説に添って、そのうちに現代人も、この運命の人の心に入って行けるように描いている。老巧である。衰運の影がちらついているながら、まだ栄華をほこっている平家の日常の姿を叙しているあ

いだに、将来の新英雄源義経である少年牛若が、ひそかに、見えつ隠れつ、その可憐な姿を保って存在を続けている有様の描写には、老練な小説的技巧がうかがわれるのである。

それで、今度私は「新平家」の最近刊行の一卷を通読した。そうすると、いろいろな事を取入れて、自分が史的調査をしたさまざまな事をみんな取入れようとしたためか、作品が水っぽくなって読者の印象が稀薄になるのである。例の妓王妓女仏御前の出沒している所に出くわしたが、このあたりは平凡な叙事文になっている。こう



いうところは吉川の素質に適していないので、さすがの大作家も持て余しているのである。この一巻を通読しながら、私は頻りに「真平家物語」を追懐した。あれは、類い稀れなる純粹の詩である。この物語の一片を取って題材とした能楽演劇小説詩歌はさまざまあるが、つまりはどれも本家には及ばないのである。

摂政基房と清盛の孫との車争い所謂「髻もとどり切り」などを例としても、悪い事はすべて清盛の所為とし、いい事はすべて重盛の所為としたのは、在来の伝説に過ぎないので、後世の歴史家の古史料の研究によると、その間違

いは明瞭であり、清盛は大政治家であり当代の偉人であると認められるようになり、昔の「平家物語」の作者などは正しい批判を欠いていたことになるのであるが、それに関わらず、この物語は日本に稀れなる優秀な叙事詩である。史実に拘泥しないで、詩人の好みのままに、あの時代の世相と人間とを唄ったので、その声はいつまでも日本人の心を魅するのである。

清盛が、妓王と仏御前の出家を聞いて「わからぬよ、どうもおれには、性来、おれは女の心を解さぬ男に出来ているのだろうか。それにしても、どうして若い女ども

が、やたらに髪を切りたがるのである。こんな流行りは止めさせねばいかん。男の入道とはわけがちがう。——清盛の室の花であろうがなかろうと止めさせねばいかん。浮世の眺めが寂しくなる」と、例の調子で言ったであらうと想像するのは面白い。こういう砕けた気持の清盛が、全体にもっとたっぷり出ていたら「新平家」に新味が増してもっと面白かったであろう。

「武蔵」には、徳川期以来の大衆文学のくさ味がたっぷりしていて、その種類のものとして傑れているにしても、私の鑑賞力は絶えずそれに反ぱつを覚えるのである。と

に角そこを脱出せんとしているような文学的精進を私は認めるのである。

これについても、私は文学の行衛を考える。

新聞に出ているうちひどく評判であった「自由学校」を、私は、一冊の本になってから読んだ。面白くって一気に読んだのだが、今日回顧すると、どういふストーリーであったかと、はっきり浮ばないほどに印象不鮮明である。感銘稀薄であるのは、私の頭脳が老齡のために衰頹していることに依るばかりでなく、作柄も私の心をと

らえ、私の心に深く刻まれるような種類のものではないのである。特異の女性特異の事件が今日の日常生活のうちに出現しているのであるが、作者はただの笑い話のよう書き流していた。毎日を面白可笑しく、多数の読者に読ませてやろうとの作者のお計らいであつたようだ。

私は、今度「てんやわんや」を面白く通読した。これは読んだばかりだから、作者の創作意図がよく解つていゝる。面白可笑しくの、瓢ひょうひょうこ々乎ひょうこたる筆が紙上に遊泳しているばかりでなく、主人公の心理行動が現実の姿をとつて克明に叙せられているといつてもいいのである。精神

のしつかりしていない主人公を、戦争直後の時代の波に漂わせているうちに、人生批評も浸み出ているのである。「無限大を求めると無限小を求めると求心運動」が、四国の末端で、茶気のあるある和尚によって起されているのなんか甚だ面白い。言論の自由信仰の自由もさる事ながら、それよりも、欠乏からの自由、恐怖からの自由に魅力を感じ、西洋からの受売りでない、田舎者は田舎者なりの空想を逞うしているところに、人間のいたましい心の動きの一例を見るのである。「臆病者の天国」それはわれわれ、無知無力の人間が、何かにつけて夢見

る天国の一模型である。面白可笑しくの笑い事ではないのである。

私は、四十年も昔に書かれた上司小剣のふるい小説「木像」を、このごろ始めて読んで、これは意味深い作品であると、ひそかに感動した。これも、精神力稀薄な、文化的教養のない一匹夫の心の動揺を克明に描叙したもので、彼は誰に智慧をつけられた訳でもないのに、人間生存についての懐疑に襲われて、その解決に悩み、臆病者の天国を夢みては、浮世の波に襲われ、その夢が破れ破れするところを、私は人事ならぬ思いをしたのであつ

た。「てんやわんや」を読むにつれて、私はその「木像」の主人公を連想した。

「木像」に出ている老婆もしっかり者で、人生に対し彼女らしい解決をしていたが「てんやわんや」にしても、その若い主人公は、きよきよとして、どぎまぎして、事に触れては安定を破られているに関わらず、その相手の若い女性は周囲の風波に怯まないで身を処している。日々の人生をてきぱきと解決している。現実の世界において実際にそうなのであるか。作者が面白づくでわざとそういう風に書いたのか。この女性は「あたし今度の事



業が失敗したら、共産党に入っでやるわ」と、相手の男にたよりを寄せているが、行詰った時の女性の解決は、単純で早い。主人公たるこの男は、女性の音信に同感し、共鳴しながらも、決行においては躊躇するのである。あるいは南国の熱血児の狂信的求心運動にも融け込むことは出来ないで、依然として「私は流浪の旅人である」と嘆息するのである。この四国に來た一年前もこの地を去る一年後も、彼の心理状態は変らなかつた。「私の前途ただ不安あるのみである」差当つては、震害で不通だった線路が今日から開通するので、混雑を予想される宇和

島駅へ、一刻も早く到着しなければならぬという、それだけが、私の大理想であると、彼は自分で結論をつけている。てんやわんやの世の中での大理想はこんなものか。

女性の微妙なる心理、めんめんたる情緒は、私の読んだ範囲では、吉川も十分に表現し得ないのである。妓王や仏御前のくだりにおいて見られる如く、それは甚だ手薄である。獅子文六にしても同様であるらしい。

石坂洋次郎の「青い山脈」の結末に、こういう事が、ある女性の口を通していわれている。

「それあ貴方が仰有るように、外国の恋愛小説などを讀

んでおりますと、豊かな、素晴らしい恋人同士の会話がでて来たりしますけど、私共の社会生活はまだそれほど成熟しておらず、ずっと幼稚な段階にあるのだと思いますわ。その地盤が出来ておらないのに。真似事のきれいな会話で飾り立てるのは、かえって惨めで、滑稽なことではないでしょうか」

その通りである。日本の小説には、文華栄える現代の小説でありながら、そこに素晴らしい読む人の心を蕩とろけさせるような恋人同士の会話はまだ見られないのである。

なお、私は大仏、石坂の作品を幾つか読むことは読ん

だが、与えられたる紙面に余地がなくなったので、それについての感想は他日に譲る。





日本文学電子図書館

---

現代作家論

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底 本：「白鳥全集」第6巻、新潮社

昭和40年8月25日 発行

昭和51年8月30日 セット版

日本文学電子図書館